
モニターの向こう側

岸野果絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モニターの向こう側

【Nコード】

N4528Z

【作者名】

岸野果絵

【あらすじ】

大規模オンラインロールプレイングゲーム『レーディアン』

そこで私は『マーシャ』というキャラクターで生活していた。

現実に対面しているわけではないが、その向こうには生の人間がいた。

そんな人々との日々の思い出。

Dノベからの転載です。

プロローグ（前書き）

（言い訳）

起承転結とか全く考えずに、だらだらいく予定です。

登場人物が多いです。

ネットゲ用語みたいなのがバンバンでて読みにくいと思います。
すみません。

ブログ

m M a k i 1 1 7さんの発言： マーシャちゃん おひさ>><

久しぶりにメッセージを立ち上げると、なつかしい名前で呼びかけられた。
私は一年ほど前まで『マーシャ』という名前でネットゲームをやっていた。

m M a k i 1 1 7さんの発言： 魔鬼だけ。。。おぼえてないかな？

忘れるはずがない。
毎日、あんなにも長い時間いっしょに遊んだ友達を忘れることなどできない。
魔鬼ちゃんは今でもあのゲーム——『レーディアン』を続けているのだろうか。

m M a k i 1 1 7さんの発言： 会えて良かった>< レーディアンが3月でサービス終了なんだ

サービス終了。

あのレーディアンがなくなってしまふ。

一年以上前に引退したとはいえ、レーディアンは古巣。
懐かしい母校のような存在だ。

懐かしいレーディアンでの日々。

あの日々のことは今でも昨日のことのようにおぼえている。

みくちゃん

はじめてのオンラインゲーム。

慣れない操作に戸惑いながらもチュートリアルを終え、外の世界への扉を開けた。

そこは、『はじまりの町ロタリオ』^{キャラクター}の広場だった。

ベンチではいろいろな格好をした人がおしゃべり（チャット）を楽しんでいた。

あたりを見回すと、いろいろな建物があった。

なんだか物珍しくて、町を一周してみた。

建物を忙しそうに行き来している人もいれば、ぼーっと突っ立っている人もいた。

露店を開いている人や、かわいいペットをつれて走りまわっている人もいた。

そういえば、チュートリアル最後に『ローズ（NPC）』に話しかけるように指示されていたことを思い出した。

ふと見ると、ベンチの横に少し派手な格好のローズが立っていた。

ローズをクリックすると『ちよっとお手伝いしてくれる？町の外へ出てニワトリから卵を10個とってきて』と頼まれた。

広場から少し行くと門があった。

きつとこの門をくぐると町の外に出るのだろう。

門をくぐるとマップが変わり景色が一転した。

ニワトリはすぐそこにいた。

戦い方はチュートリアルで教わっていたので、攻撃を仕掛けてみた。

初心者にとっては『ニワトリ』ですら脅威だ。

戦いが終わったときにはHPは半減ヒットポイントしていた。

チュートリアルでもらった薬を飲み、次なるニワトリへ挑みかかる。

と、後方から『クマ』が近づいてきた。

こちらから攻撃を仕掛けない限りは大丈夫だと思っていたが、それは大間違いだった。

後で知ることとなるが、クマはいわゆるアクティブモンスターだったのだ。

そんなことは夢にも思わずニワトリとの戦いに集中していた。

突然、驚くような桁違いのダメージを受けた。

HPはその一撃で0になった。

何が起ったのかわからないまま、私のキャラクターはその場に崩れ落ちた。

死んだのだ。

そう思った瞬間、黄色い光につつまれた。

HPは全回復し、立ちあがっていた。

みく： 熊は攻撃してくるから気をつけて

気がつくと、いかにも上級者という出で立ちの女の子が立っていた。

それが初めてのお友達『みく』ちゃんとの出会いだった。

セラフィン

みくちゃんは大抵口タリオの広場や門のあたりでおしゃべりをしていた。

最初のころ、みくちゃんは私を心配してくれて、みかけると声をかけていた。

そして、ポジションなどを支援してくれた。

そのうちに、私がみくちゃんを見かけると挨拶をするようになっていた。

私はみくちゃん経由でいろいろ人と知り合うことができた。

ネットゲームの醍醐味はなんといってもコミュニケーションだ。

一人でも知り合いができると、あつという間に世界が広がる。

知り合いの知り合いというかんじで1人が2人、3人が10人というように人脈がどんどん広がっていくのだ。

私はみくちゃんと知り合ったことでまたたく間に交友関係が広まったのだ。

『kanatachanning』『ブルーフォース』『やつくん』

ともみくちゃん経由で知り合った。

この3人は私より数日先輩だった。

レベルが近いと一緒に遊ぶのに都合がいい。

私は初期のころは、この3人と過ごしていた時間が長かったように思う。

毎日、夜の早い時間帯はkanatachanningと遊んでいた。

そして、夜が更けていると、ブルーフォースとやつくんが加わった。日付が変わるころに私はログアウトした。

3人はその後も明け方まで遊んでいるようだった。たまに、私が早朝にログインするとブルーフォースとやつくんはまだ遊んでいるということも多かった。

とくにkanatachannngはリアル女性同士だったので仲良くしていた。

まわりが先輩だらけだったkanatachannngにとって私は新鮮な存在だったようだ。

私にとってはkanatachannngは気軽な存在だった。

みくちゃんはまだにもレベルが離れすぎていて、ちよつとしたことを気安く頼めないかったのだ。

上級者に狩りなどにつきあってもらっても、私のレベル上げにはなっても、相手にはなんのメリットもない。

しかし、レベルの近いkanatachannngなら、ちよつとしたことを頼んでも、相手のレベル上げになった。

その上、kanatachannngは私よりちよつとレベルが上だったので頼りになる存在だった。

私はいふなればkanatachannngの妹分のような感じだった。

kanatachannngは気が向くといつも1:1チャットなどで話しかけてきた。

そして、ロタリオ以外の町やダンジョンなどいろいろな所に連れて行ってくれたものだ。

そういえば、『セラフーン』に連れていつてくれたのもkanata
achanngだった。

kanataachanng： マーシャちゃんてセラフーンには行
った？

マーシャ： セラフーン？？

kanataachanng： そそ。セラの神殿はファミリー登録
ができるんだよ。

マーシャ： ファミリー？おもしろそう

kanataachanng： 家族になるとインしてるかどうかわ
かるし、便利だよ。

マーシャ： 私でもなれるの？

kanataachanng： うんうん。私のキャラ情報みてみて。
家族ボタンおしてみて

マーシャ： かなたちちゃんは 師匠、母、兄弟、友達がいるんだね。
kanataachanng： そだよ。マーシャちゃんも家族にな
ろうよ

マーシャ： なりたい なりたい

kanataachanng： じゃあ、連れてってあげる。ポーシ
ョンをたくさん用意して。たいまつも

私はなけなしの金をはたいて松明とポーションを買い込んだ。
待ち合わせはロタリオの東にある洞窟だった。

たいまつを使用して中に入る。

私とkanataachanngの周りだけがぼーっと明るくて、あ
とは真っ暗な闇。

kanatachannng: アクティブが多いから、しっかりついてきてね。

kanatachannngは暗闇の中をどんどん進んでいった。右に曲がったり、左に曲がったり、階段を下りたり上ったり。

私といえついていくのに精一杯で、とても道を覚えられそうもなかった。

途中には気味の悪いモンスターがうようよしていた。それらに攻撃されないように、必死に走り続けた。

たいまつの効果切れるころ、私たちは洞窟を抜け出ることができた。

外に出ると、暗闇から一転、あたり一面の雪景色。

真っ白なマップを雪男がうろついていた。

kanatachannng: 左に行くとフィリアだけど、セラに行くには右 雪男ケン

kanatachannngは雪原を右に走りだした。

あわてて私もあとに続く。

そして、また洞窟らしきものにたどり着く。

どうやら今回はたいまつはいらないらしい。

kanatachannng: 魔法が飛んでくるから死なないでね。

洞窟の中には蜘蛛がいて糸（魔法）を吐いてくる。

糸が当たるとダメージを受けた。

私はポーションをがぶがぶのみながら必死に走り続けた。

洞窟をぬけると、今度は草原だった。

草原にも魔法を飛ばしてくるモンスターがいた。

ポーションはどんどん減り、あと数本になってしまった。

と、またマップが変わった。

目の前に吊り橋がり、その先には門が。

やっとセラフーンについたのだった。

そして、私たちは神殿に行った。

kanatachanningのファミリー欄はほとんどがうまっていた。

あいているのは父と弟子とラヴァー（恋人・配偶者）だけだった。

父やラヴァーじゃおかしい。

私はkanatachanningの弟子になった。

理想のカップル

家族ができるとログインするのがさらに楽しくなった。
もつともつと家族を増やしたくもなってきた。

家族はラヴァー、師匠、父、母が1人ずつ、子と弟子が2人、兄弟が3人、友達が5人登録できた。

私はどんどん家族登録をしていった。

みくちゃんが母、ブルーフォースとやつくんが兄弟になってくれた。
そして『マリア』ちゃんは友達になってくれた。

マリアちゃんは知り合ったところ、すでにラヴァーがいた。

私はマリアちゃんを通して、ラヴァーとはどういう存在なのか知ったようなものだった。

マリアちゃんは釣人を目指していた。

いつもロタリオのはずれの釣り場で釣りをしていた。

そして、隣にはいつもラヴァーの『Ray』くんがいた。

この二人は本当に仲が良くて、狩りに行くときも必ず二人一緒だった。

マリア： ちょっとまってね。レイ呼ぶから

Rayくんと一緒にいないときに盛り上がって狩りに誘うと、そう言ってRayくんを呼んだ。

そして、Rayくんは必ずやってきた。

レーディアンでは家族というものを演じている人が多かったように思う。

家族の力になることは当然のことだった。

家族がひどい目にあわされたら仕返しをする、なんてことも多かった。

逆に、人の恨みをかうようなことをしている人と家族になると、代わりに仕返しをされたりもした。

父、母、師匠は子供や弟子を保護してくれ、兄弟はつるんでくれる仲間。

友達は今仲良しだけど、ちょっと他人気味な感じだった。

なかでもラヴァーは別格だった。

一番の親友——まさに恋人のような扱いだった。

ラヴァーのためなら、何が何でも飛んでくる、そんな感じだった。本人に連絡がつかなくても、ラヴァー経由で話をつけたりすることも多かった。

マリアちゃんとRayくんの場合は本当に絵にかいたようなラヴァー関係だった。

私にとってはまさにのカップルのお手本だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4528z/>

モニターの向こう側

2012年1月5日17時50分発行